

カタストロフィと人間性——若さについて

ゾラン・デイミッチ

カタストロフィと数

これから一緒にカタストロフィと人間性の概念の関係を探っていく前に、私はまずカタストロフィをめぐる問題についてみなさん方の注意を引いておこうと思います。すなわち、実際何がカタストロフィをカタストロフィたらしめているのでしょうか。カタストロフィについて議論するとき、実のところ何が問題となっているのでしょうか。

2011年の東日本大震災とそれに続く津波と原子力発電所の危機をめぐるのは、さまざまな科学的報告や報道が私たちにいつものように知らせることがあります。たとえば、死者数 (15,870人)、負傷数 (6,144人)、行方不明者数 (2,814人)、半壊家屋の数 (691,766棟)¹、全壊家屋の数 (129,225棟)、地震での保険損失、経済的損失、前震と余震の回数 (それぞれ7回、1,235回) (Lovett, R. 2011)。そして次の事柄も数に関係しています——地震の規模 (マグニチュード9)、本震の正確な時刻 (日本標準時2時46分)、震源の深さ (32km)、本土からの距離 (32km)、津波の高さ (38.9メートル) (Okada N. 2011 : 34-42)。福島第一原発では最も壊滅的な結果が生じ、3基がレベル7にいたる事故、そして1基はレベル3の事故に陥ったことなど。

数、数、数ばかりが並びます。すると私たちは、カタストロフィとは数に関するのだ、と片付けてしまいそうです。

¹ “Damage Situation and Police countermeasures...September 12, 2012”, National Police Agency of Japan. Retrieved 17 September 2012. [以下の警視庁ホームページから最新版日本語PDFファイル「被害状況と警察措置」が閲覧可能 <http://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/index.htm>]

これらの報告や報道で、地震や津波の地球物理学上の影響に目を向けると、またしても数に直面します。地震により地軸は推定10cmから15cm動きました (Chai, C. 2011)。このずれによって一日の長さも変わるようになりました。地球の自転速度が速まることで、地球の質料は再分配されて、一日の長さは1.8マイクロ秒短くなったのです (CBS NEWS, 2011)。これらの報告にある数のほかにも、多くの記録的な情報がみつかります。すなわち、今回のものは日本を襲った地震のなかで統計上最も強力な地震であったこと、そして、1900年に開始された近代の記録と照らすと世界の五指に入る強力な地震であったことです (Branigan, T. 2011)。また津波の高さも記録的でした。したがって、2011年に日本を襲ったカタストロフィについて言えば、突如として私たちは数によって完全に包囲されてしまうのです。このカタストロフィに対する国内外の反応は、科学的な解説や考察、分析と同じく数に頼っています。3月30日までに134の国と地域が日本への自発的な援助を表明しました。私は、解説や考察の代わりとして、本震の日に東京では振動がはじまる前に警報が約80秒間鳴っていたことを強調しておきたいと思います。世界でよく知られているとおり、日本は公共災害教育に対して大きく力を入れており、そのことで国民はカタストロフィに対して非常に高い危機意識を持っています。これら備えの目的はひとえに、「人間の死をいかに減らすか」にあります。自然によるカタストロフィの際、死者数を減らすことができれば、私たちは防災措置に成功したと言えるでしょう。カタストロフィの本質はその物質的な破壊の程度を測ることによって、そして何よりも死者数によって判断されます。本当に数でカタストロフィの本質を表すことができるというのでしょうか。チリの市民が日本から17,000km離れた彼らの国の太平洋沿岸に達した津波の高さが二メートルだと知ったとしましょう。それで彼らは日本を襲ったカタストロフィの本質をよりよく理解する機会を得たことになるのでしょうか。あるいは破壊による経済的損失額が2,350億ドル (約19兆円) にのぼり、自然災害での世界史上最高損失額になると世界銀行が発表したところで、私たちがこの度のカタストロフィをよりよく捕らえる手助けになるというのでしょうか (Kim, V, 2011)。

こうして私たちは数、記録、規模、程度によってカタストロフィのありさまを表現します。これが今日の世界でカタストロフィの問題を理解する支配的な方法です。2011年に日本を襲ったカタストロフィを扱った現代の科学的報告が、数で支配

的に特徴づけられるのは一体どういうことでしょうか。私たちがカタストロフィについて語るとき、数で完全に満ち溢れているのはなぜでしょうか。今回のカタストロフィは本当に数値化するものでしょうか。

ライプニッツによる近代科学の観念

こう考えてみると、私たちはカタストロフィの問題がどうも亡くなった人間、あるいは少なくとも人道主義の問題であることに気がきます。しかしこれまでのところ、私たちはまだカタストロフィの問題がいかにして人間性そのものに関連するのかわかりません。なぜそのように結びつくのでしょうか。科学による世界の数量的な把握によって私たちは人道主義の問題に導かれますが、人間性の問題へと帰着するわけではありません。その理由を理解するために、私たちは近代科学が確立された初期を振り返らなくてはなりません。

近代科学の観念をうち立てたもっとも重要な人物の一人はドイツの哲学者ゴットフリート・ヴィルヘルム・ライプニッツです。彼自身が近代科学を定義したことで、彼の名前と哲学は近代ヨーロッパの黎明期に起きた有名なカタストロフィ、すなわち1755年のリスボン大地震——この地震は2011年の日本の地震と同じく三重のカタストロフィでした——へとさまざまな点で結びつくのです。ライプニッツが抱く科学の理想は「普遍数学 (mathesis universalis)」という発想に表されています。彼はそれを「普遍学 (scientia generalis)」、すなわち、学問の方法論、そして思考と探求において論理に基づく普遍的方法として理解していました。要するに、ライプニッツにとっては科学が全宇宙の永遠の本質だったのです²。「存在 = 本質 (being)」の構造と同様に、人間理性の構造もはっきりと数学的なのです。彼にしてみれば、どうも数が存在 = 本質だと解釈できそうだった (Gerhardt, 1875, II : 304)。「物の本質は数に等しい (Essentia rerum sunt sicuti numeri)」。「しかし、数に従属しないものはない (Sed nihil est quod numerum non patiatur)」(Gerhardt,

² エルンスト・カッシーラーによれば、「ライプニッツの哲学では、数はすべての厳密な関係の普遍学 (allgemeine Wissenschaft aller exakten Beziehung) である」。Cassirer, E. (1996.) Aus Logik und Mathematik, in G. W. Leibniz, Hauptschriften und Grundgedanken der Philosophie, Hamburg, F. Meyer, Bd. I, S. XVIII.

1875, VII : 185 [『ライプニッツ著作集十』、二八〇頁])。それとともに私たちは、根本的な主題「カタストロフィと人間性」に関連づけられる重要な引用に出くわすわけです。

「われわれは、大きさ、形、運動、知覚そのもの以外は何物も正確に知覚できないのだから、したがって、万物はこれら四つのもので説明されるべきである (Cumque nihil e nobis accurate percepiatur, quam **magnitudo**, figura, motus, et ipsa perceptio, hinc sequitur, omnia haec quattuor explicari)」(Gerhardt, 1875, VII : 265)。

ライプニッツの解釈によれば、万物は[・]大[・]き[・]さ (magnitudo)、[・]形 (figura)、[・]運[・]動 (motus) によ[・]っ[・]て[・]理[・]解[・]さ[・]れ、[・]説[・]明[・]さ[・]れ[・]る[・]は[・]ず[・]な[・]の[・]で[・]す。万物が数 (numero)、寸法 (mensura)、重量 (pondere) にしたがって創造され、それゆえ大きさ、形、運動による理解や説明が可能なら、自然とは完全なる機械的力学だといえるでしょう。したがって、ライプニッツは「世界とは最大の賛辞に値する機械 (machina maxime admirabilis)」だと結論付けるわけです (Gerhardt, 1875, VII : 337)。ライプニッツによる科学の観念とはこうしたものでした。

ここで私たちの主題に戻ると、このような近代科学の観念にしたがえば、とりわけ自然現象はつねに数学的、機械的に説明する必要があるのです。ライプニッツによる科学の観念は、近代という時代をそっくり表現しています。数学を測定し、計算し、算定する方法として捉えれば、数学は応用されることに意義や重要性があるのです。その主な任務は人間の生活に役立つことです。ライプニッツは、「計算に従事する人 (計算機) (Le Calculateur) と呼ばれたスコラ哲学者ジャン・スイセに強い刺激を受けました。スイセは討論 (disputatio) という方法論を一切捨て去り、計算という方法論を採用しました (Coutarat, L. 1903 : 177)。算出 (計算) が人間理性の根本たる本質を反映しているのです。それゆえ、「思考することは、まさに算出することである (Per rationcinationem autem intelligo cumputationem)」。スイセとライプニッツは、思考を算出として理解すれば私たちは不確実な誤謬から永久に解放される、と疑いもなく信じていました。思考が数学の証明と等しいわけですから、すべての懐疑や不確実性は消え去ることになるの

です。ライプニッツは誰が正しいかを確かめるために討論するのではなく算出するよう提案します (Coutarat, L., 1903 : 176)。そうすると、ある事柄をめぐる互いに意見が異なる二人の人物のあいだでも、彼らは意見の不一致によって敵対し合う論争者のようには振る舞わないでしょう。むしろ彼らは仕事を終えた後で一緒に帳簿をつける商人のようになります。どうやら、ライプニッツは算出のことしか考えられなくなり、次のようなことを単純に信じていました。哲学者と科学者は「これからは (いかなる哲学的、科学的問題も) 算出することができるので、もはや論争することはないだろう」、そしてさらには、「彼らはもはや論争の必要がない」³。

ありうるなかで最善の世界

これらを踏まえるならば、数学は学問 (science) だけでなく私たちの生活にも確実性 (主観的確信) を与えることになります。すると、とりわけ数、大きさ (magnitudo)、記録は私たちの生活に理想的な安全性、確実性、平穏をもたらすのでしょうか。算出によって、私たちは異なった視野や対立する立場の人々がずっと和睦し続ける「世界に目覚める」ことになります。このようにして、自然現象に対するライプニッツの数学的解釈は私たちを「最善説 (optimism)」、「ありうるなかで最善の世界」の観念へと導きます。もっと言えば、ライプニッツ哲学では神さえも数学者だと言ってもあながち間違いではないでしょう。言い換えると、ライプニッツは全宇宙が至高存在 = 至高本質 (Supreme Being) の企図の結果として創造されたと言っているように思えます。その至高存在 = 至高本質とは数学的能動性です。「神が思考を算定し (calculate) 行使することで、世界が存在する (Cum dues calculate et cogitationem exerceret, fit mundus)」(Gerhardt, 1875, VII : 191)。伝統にのっとりた有神論的な神の概念を保持し、世界は今とは別様になりえたと意味深長な主張を信じようとしても、やはり世界はありうるなかで最善だと考えざるをえなくなります。神の創造は数学による「着想に基づいている (inspired)」わけですから、私たちは数学が全宇宙の本質と同時に最善説の根源だと結論付けられるでしょう。

³ “Quo facto, quando orientur contraversie, non magis disputatione opus erit inter duos philosophos, quam inter duos Computistos…” (Erdmann, 1840 : 82)

この種の科学は人類とその幸福のためだけに存続することになるのです。不幸なことに、ライプニッツの最善説的な世界観は——17世紀終わりと18世紀初めに一般的に認められるものでしたが——後に劇的に途絶えました。1775年のリスボン地震はポルトガル王国で起き、当時のヨーロッパをすっかり変えてしまいました。リスボン地震の後には、それまでのヨーロッパの歴史とはすべてが変わってしまったのです。地震とそれに続く火事、津波が合わさって、リスボンの街とポルトガル南部はほとんど破壊し尽くされました。日本の地震の例にならって算出を用いると次のように言うことができます（これらは人間性の問題と関わらないとわかってはいますが）——1775年リスボン地震は11月1日の朝9時40分ごろ発生し、リスボンの街の85パーセントの建築物が破壊されて世界的に有名な宮殿や図書館も壊されてしまった。リスボンとポルトガル南部の推定死者数は1万人から10万人（Pereira, 2006: 5）。震央はリスボンから約300km離れた大西洋。地震から約40分後に津波が港と街の中心街を襲い、さらに二つの波が続いた。津波の及ばない地域では火事が発生し、炎は5日間猛威を振るった。地震の震動はフィンランドや北アフリカにまで至り、ヨーロッパ中を見舞った。20メートルにも達した津波は北アフリカの海岸を一掃し、大西洋をまたいだマルティニクやバルバドスの街も襲った（Ulmer, S 2005）。

地震はカトリックの重要な祝日に起こり、市内の重要な教会をほとんどすべて破壊してしまったので、神学者たちはこの出来事の宗教的原因やメッセージを読み解こうと思案を凝らしました。地震は神による審判の顕現だと考えられたのです。更には、リスボンのカタストロフィは当時のヨーロッパ知識人界、啓蒙主義の時代に強い影響を及ぼしました。フランスの哲学者ヴォルテールは『カンディード』（1759年）と「リスボンの災害についての詩（Poème sur le désastre de Lisbonne）」でこのカタストロフィをとりあげています。ヴォルテールは、この「ありうるなかで最善の世界」ですべては最善を目指すという概念を攻撃します。こういうわけで、この地震は当時の最善説という学説（ライプニッツの哲学体系）に格別重要な影響を与えました。というのもその学説では、このような出来事は起らないと含意されていたのですから。最善説はライプニッツの神義論に基づき、慈悲深い神の庇護によりすべては最善を目指す——「ありうるなかで最善の世界では、すべては最善を目指す」——と謳っていたわけですから。ヴォルテールは、もしこの世界が最善である

なら、世界は実際今より更に善くなっているはずだと確信し、リスボン地震の後にライプニッツの最善説を拒否します。彼は『カンディード』と「リスボンの災害についての詩」の二つの作品のなかで、この最善説的な考えを攻撃したのです。ヴォルテールはこの問題を論じるのにリスボン地震を取り上げており、この出来事は「ありうるなかで最善の世界」において、ありうるなかで最も恐ろしい災害だ、と風刺的に述べています。このカタストロフィについては、根拠のない噂がヨーロッパ中を駆け巡り、時にはこの出来事の過酷さを誇張したものもありました。

カタストロフィ経験における若さと老い

これまでの議論からもわかるように、近代科学による自然の計量的・数学的な理解は、人間の暮らす世界に確実性をもたらさしませんでした。リスボン地震の影響を広範囲で科学的に研究した結果、近代の地震学や地震工学が誕生しました。当時のポルトガルの宰相マルケス・デ・ポンバルは、震度 (magnitudo) の測定を含め、この地震の原因と結果を広範囲にわたって客観的かつ科学的に記述しようとした最初の人物でした。それゆえ、彼は近代地震科学の先駆者とされています。彼は地震の実態と影響をポルトガルの全教区にわたって調べさせました。その調査は、地震の起こった正確な時刻、その継続時間、死者や負傷者数、海面の上昇度、倒壊した建築の数など、とても詳細なものでした (Shrady, 2008 : 145ff)。またしてもカタストロフィが数に関係しているようにみえてきました。しかしながら、地震の強さや津波の高さを測り算出できたところで、ポルトガルや他のヨーロッパの人々の精神に平穏さや静穏さをもたらされませんでした。それどころか逆に、リスボン地震での算出技術は人々の生活に、カタストロフィがまた起こるかもしれない、というとてつもない恐怖を植え付けたのです。過去のカタストロフィは来るべき新たなカタストロフィの前兆と見なされました (Benjamin 1999 : 536-540)。リスボンのカタストロフィの後、ヨーロッパ全土は純真さや若さを失い、急速に年老いた、と言えるでしょう。

やっと私自身の論点へと到達したのですが、カタストロフィは一方で、純真さや無垢、若さを失うことに、他方で、年老いることと関係するのです。年を重ねた人は過去について語る必要があり、想起する必要があるのです。かくして、リスボン地震が最善説の危機と歴史哲学の誕生をともに特徴づけたのだと広く認められてい

ます (Marquand 2004 : 46ff)。ライプニッツの示唆とは逆に、つまりカタストロフィを算出し怖れるのではなく、私はこの主張に異議を唱え、目を見開きながら強固に立ちほだかって、若さを保持し続けたいと思います。日本の地震とリスボン地震の統計的報告に安住するのではなく、文明の終わり、黙示録への駆け引き、時間の終焉の予言、時代の終りの歴史的予言を口にするのではなく、むしろ若さについて、年を重ねるのではなく若さを保持し続けることについて議論したいのです。私はそれこそまさに古代ギリシア語「カタストロフェ (katastrophē)」が意味するものだと確信しています。

古代ギリシアにおけるカタストロフィ——転換と想起、人間性

元来のギリシア語「カタストロフェ (katastrophē)」は何よりもまず古代演劇に関連しています。この語は予期しえない転換、あるいは大地の激しく急激な変化を意味します。いくら予測しようとしても、そのような出来事は当然、予測不可能です。それゆえに、カタストロフィたりえるのです。もし私たちがそのような予期せぬ出来事を予測できるとしたら、もはやそれをカタストロフィと呼ぶことはできないでしょう。近代科学の数学と算出に固執するあまり、ライプニッツはもっとも厳密な決定論へと至りました。神はあらゆる可能世界のなかで最善の世界を選び、この決定を変えることは永久にありません。もし神がこの決定を取り消すようなことがあれば、自らの完全性を損なうでしょう。したがって、創造主は「最善の決定以外を選ぶことができないので、その行動はつねに決定されている」(Erdmann, 1840 : 191)。もし神に選択の自由がないとすれば、神は必然性にしがうことになります。神が完全であればあるほど、その行動は決定されます。神はありうるなかで最善の世界で何かを変える必要はないのです。ですから、ライプニッツによる神の概念は宇宙に存在する法則や秩序の具現化なのです。そういうわけで、近代世界では予測することが科学の最も重要な役割の一つになったのでした。決定論はある意味で、近代科学の支配的な了解形式です。数や大きさ、数値を絶えず管理するかぎり、私たちはつねに未来を予測します。反対に、古代ギリシアでは「カタストロフェ (katastrophē)」は過去の方に力点が置かれていました。

プラトンの対話編『ティマイオス』では、アトランティス大陸のカタストロフィが議論されますが、その直接的な文脈はソロンのエジプト旅行と結び付いていま

す。ソロンはエジプトでギリシアの人々の過去について尋ねたのでした (Timaeus, 21e-22a)。『クリティアス』でもプラトンは、その古代アトランティスとアテネの災害の考察が、アテネの伝説的な立法者で詩人のソロンによる紀元前6世紀のエジプト訪問に由来すると述べています (Critias, 113a)。古き時代——ソロンの時代のギリシア人が実際に知らないほど古い時代——について尋ねながら、彼はサイスのある神官に出会います。その神官は、パピルス紙にエジプトのヒエログリフで記録されていた古代アテネとアトランティスの歴史をギリシア語に翻訳していました。よく知られているように、アトランティスについての私たちの知識はあてにならず不確かです。これはプラトンの『ティマイオス』と『クリティアス』での記述にも当てはまります。私はここで、これら論争含みの課題について語ろうというのではありません。私はただ次の事柄についてみなさん方の注意を引いておきたいと思います。つまり、プラトンの二つの対話編では、カタストロフィをめぐる論争の直接の文脈はたんに、過去に対する予期 (prólepsis) の問題なのです。キリスト教や近代とは反対に、プラトンやギリシアの人々の精神的な地平は過去に向けられています。これまでに起きたことは必ずまた起こる。古代ギリシアの世界は未来のために営まれていたわけではありません。そのユートピア的意識と究極の真理は想起 (anámnesis) と結び付けられていました。起こりうる可能性があるすべてのものは、過去、あるいは存在の永遠性のなかに凝縮されています。プラトンやギリシア人は、これまで起こらなかったことを予測できるとは思ってもみませんでした。したがって未来の予期や予測は、まったくもってキリスト教と近代世界の発見なのです。プラトンはかつてどこかに存在した理想的な状態の想起をめぐる文脈でカタストロフィという主題を展開します。ホメロス、ヘシオドス、最初期の哲学者や詩人の時代から、彼らはみな、さらに昔の時代に何が起こっていたかを明らかにしようとしました。存在 = 本質 (being) は過去に隠されています。すなわち、過去に存在したことは、今もまだここに存在し、そしてこれからもつねに存在するだろう、というのです。

『ティマイオス』と『クリティアス』でカタストロフィのような出来事が記述される際、現実はずねに非現実と結び付けられています。現実はあまりに残酷かつ危険なので、私たちはその真実性を信じられなくなり、幻想に変えてしまうのです。と言ったところで、プラトンによるアトランティスの記述で何が事実で何が虚

構なのかを問うことは、私にとって重要ではありません。プラトンは私たちにカタストロフィのような出来事を想起するよう誘いかけます。そして、そのことが彼の記述のなかで最も重要なのです。私たちは想起し、消滅した文明をよみがえらせます。カタストロフィのような出来事を語り論じて、亡くなった特定の人々について思いめぐらし、彼らの勇敢な振る舞いや偉大な仕事を称えることで、私たちは彼らを生き返らせ、自らの生活のなかに現存させるのです。私たちの言葉や思考には転換 (strophé) させる力があります。想起という行為を通じ、過去は現在の一部になります。そうすることでのみ、カタストロフィのような出来事が人々の歴史の一部に、すなわち、人間性の歴史の一部になるのです。こうして、われわれはプラトンの『ティマイオス』と『クリティアス』から、カタストロフェ (katastrophē) がまさに人間の本質そのものに関係するのだ、と学びます。要するに、カタストロフィの概念は、人間性の定義に直接関係するのです。よく知られているように、「人間性」という語は非常に複雑な概念です。それはただ単に、(人間性の観点から)「人 [mankind]」、「人間 [human race]」、「人類 [humankind]」を意味するのみではありません。同時に(自然災害に襲われた人を助けるという観点では)「慈悲深さ [humaneness]」、「人道主義 [humanitarianism]」以上の意味を持ちます。ラテン語のフマニタス (humanitas) は、「教育」を意味した古代ギリシア語パイデア (paideia) が翻訳されたものです。ただ、この語は今日の「教養 (culture)」という概念も含んでいます。それゆえ、「人間性 (humanity)」とは、人間になること、人間であること、人間の陶冶の方法なのです。本稿の題名が「カタストロフィと人間性」であることを思い出していただいたところで、極めて重要な問いを提起したいと思います。いかにして「カタストロフェ (katastrophē)」は、人間になること、人間であることに関係するのでしょうか。

私たちはここで、プラトンが『ティマイオス』と『クリティアス』で述べたかったことを予想してみましょう。二つの対話編が執筆されていた頃、アテナイ人は困難な時代を経験していました。プラトンの意図は彼らの失われた自信を回復させることだったのです。『ティマイオス』と『クリティアス』の主題には政体の議論も含まれますが (Timaeus, 20b)、プラトンはアテナイの制度は永続性があり優れているのだと彼らに力説し、その自信をよみがえらせたかったのです。この二つの対話編の主な目的は教育、すなわち人間性——彼らにアテナイ人としての自己肯定の

機会を与えること——に関わると断定しても的外れではないでしょう。この考えにしたがえば、カタストロフィをめぐる話題はすべて、ある種の人間の自己肯定へと転換される (strophé) と言えるかもしれません。不断の自己肯定は自己忘却や失念を阻止します。自己を肯定すべく努める人は、現に自らの活気や快活さを肯定したいものです。こうして、私たちはまた若さの問いに至ります。

ここでプラトンの『ティマイオス』からの引用を参照してみましょう。この場面では前述したエジプト人神官がソロンに次のような言葉を発します。

「おお、ソロンよ、ソロン。お前たちギリシア人はいつでも子どものままだ。つまり、ギリシア人に老人などいない」

これを聞くと、彼は尋ねた。

「それはどういう意味ですか？」

すると神官は答える。

「お前たちは皆、精神は若いのだ。なぜなら、お前は精神のなかに古代の、そして古い伝統に由来した信念も時代ともに古めかした学問も持ってはいない。理由はこうである。人は様々に滅亡してきたし、これからもそうだろう。その最大のものは火や水によって引き起こされた。他にも数えられない理由によって滅亡してきたが、それはそれほど大した理由ではない (…)」(Plato, 1925 : 22a-c [『プラトン全集一四』、一六頁])

ここでプラトンは、彼特有の巧みで劇的な演出によって、カタストロフィの問題に対する私たちの関係の重要性を問いかけます。カタストロフィをめぐる主な問いは、カタストロフィの実態と影響ではなく、私たちがカタストロフィといかに関係するかです。カタストロフィと関係を持つことの方が、カタストロフィそのものより重要です。あるいは、より正確にいうと、カタストロフィに関して最も重要なことは、カタストロフィに関係する自分自身に私たちがどう関係するかです。こう考えてみると、私たちがカタストロフィについて語る時、中心となる主題はすべて自己との関係であるといえるかもしれません。カタストロフィに関する主な問いは、自己との関係に収斂するでしょう。それゆえ、先で生じた決定的な問いはこう

言い換えることができます。すなわち、これまで多種多様な破壊があり、それは今後も起こりうることを自覚した後、私たちはそれでもなお若さを保っていられるでしょうか。私たちは、どのようにカタストロフィの本質（その周期性、言い換えればその反復性）に立ち向かえばよいのでしょうか。カタストロフィの性質上それに何度も襲われるはしようもないのですから、私たちはこれに対処するしかないので。カタストロフィを自覚し、それが回帰する可能性とともに生きていく唯一の術は、それを決定的で最終的な災害というより、転換（turn, strophé）あるいは回帰〔re-turn〕、つまり自らに内在する人間性を肯定する機会なのだとして理解し、受け入れることです。それは同時に、人間特有の行為である自己関係の過程を開始する機会でもあるのです。自己関係とは人間になる手段にほかなりません。とりわけ人生の悲痛な状況においては、くり返し自己に関係する能力によってこそ、われわれは人間性へと固く結ばれます。それはたんに何らかのカタストロフィのような出来事に遭った人々への人道的援助にとどまらず、人間性が私たち自身に関係するのです。人間性がそれ自身で確立され、自己関係において成長し発達します。自己関係とは人間性を生成する源泉なのです。つねに自己と関係し、肯定し続けることで、私たちは「老いること」を、忘却に身を任すことを拒みます。そういうわけで、カタストロフィをめぐる話題は若さについての話題へと転換すべきなのです。自己関係、自己肯定は、言いかえれば、精神や身体への配慮を表わします。そうした配慮は、精神や身体が未熟なまま「年を重ねる」のを防ぎます。精神や身体を「若く」保つことこそがパイデア（paideía）（フマニタス、教育、養育、教養）の主たる目的なのです。

覚えてらっしゃいますように、私は本稿を2011年の東日本大震災に関する多くの数、大きさ、測定、記録を引用することから始めました。おそらく算出や計算によって、いくつかの人道主義的な問題へ辿り着きはしましたが、それは人間性をめぐる問いには関係しませんでした。カタストロフィの問題とその人間性との関係の問題を十分に把握するためには、私たちは近代科学の確立へと注意を傾けなければなりません。近代科学が私たちを導いたのは、おそらくカタストロフィの本質をめぐる議論ではなく、その算出についてでした。私たちは大きさや数、程度で未来を予想するようになりました。もちろん、地震学が重要であることは否定で

きません。このような科学とともに発展してきた知識で、私たちは多くの命を救えますし、破壊からの被害を減らすこともできます。しかし同時に、カタストロフィの予期は不可能だと告白せざるをえません。よく知られているように日本で起きたあの地震は、当該の地域では予期されていませんでした。地震学者たちは日本海溝が大きな揺れを引き起こすとは知っていましたが、まさかあれほど大きな力（マグニチュード8以上）を持った揺れを発生させるとは思ってもみなかったのが、東京から北東373km地点での地震に驚いたのです。そういうわけで、私はカタストロフィをめぐる講演を未来から過去へと「転換する (strophé)」のがよいと考えました。このようにすると、変動や災害に関する論調は消え、「人間的な面」が姿を表します。カタストロフィとは、たんに人々の生活における転換点なのです。私たちがみな知っているように、人生はこわれやすく、もろいものです。地球に暮らす人々の生活は、いつでも回帰する恐ろしい災害と隣り合わせです。カタストロフィと対処する唯一の術は、それを人間性の主たる恩恵へと変えることです。その若さを保持し続け、恐ろしい出来事による老いを許さないことが人間性の恩恵なのです。

参考文献

1. Okada Norio, Tao Ye, Yoshiro Kajitani, Peijun Shi, and Hirokazu Tatano, The 2011 Eastern Japan Great Earthquake Disaster: Overview and Comments, 2011. *Int. J. Disaster Risk Sci*, 2 (1) : 34-42.
2. Lovett, R. 2011. "Japan Earthquake Not the "Big One"?", *National Geographic News*. 14 March. <http://www.webcitation.org/5xDGM2150>, [15.10.2012]
3. Chai, C. 2011. "Japan's quake shifts earth's axis by 25 Centimetres". *Montreal Gazette*. (Postmedia News), March 11. <http://www.webcitation.org/5x95t0CLU>. [15.10.2012]
4. CBS News. 2011. "Earth's day length shortened by Japan earthquake". 13 March. <http://www.cbsnews.com/stories/2011/03/13/scitech/main20042590.shtml>.
5. Branigan, T. 2011. "Tsunami, earthquake, nuclear crisis – now Japan faces power cuts", *The Guardian* (London). March 15. <http://guardian.co.uk/world/2011/mar/13/japan-tsunami-earthquake-power-cuts>.
6. Kim, V. 2011. "Japan damage could reach \$235 billion, World Bank estimates", *Los*

- Angeles Times. 21 March. <http://www.latimes.com/business/la-fgw-japan-quake-world-bank-20110322,0,3799976.story>).
7. Cassirer, E. 1996. *Aus Logik und Mathematik*, in G. W. Leibniz, *Hauptschriften und Grundgedanken der Philosophie*, Hamburg, F. Meyer.
 8. Gerhardt, C. I. 1875-1890. *Die philosophische Schriften von Gottfried Wilhelm Leibniz (Bd.2,7)*, hrsg. von C. I. Gerhardt, Berlin, Weidmannsche Buchhandlung. [下村寅太郎ほか監『ライプニッツ著作集』、工作舎、一九八八 - 一九九九年]
 9. Couturat, L., 1903. *Opuscules et fragments inédits de Leibniz. Extraits des Manuscrits e la Bibliothèque Royal de Hanovre*, par L.Couturat. Paris. Alcan.
 10. Erdmann, J. E., 1840. *God. Guil. Leibnitii Opera Philosophica quae exstant Latina, Galica, Germanica omnia Edita recognovit. e temporum rationibus disposita, pluribus ineditis auxit, introductione critica atque indicibus instruxit J. E. Edmann. Cum Leibnitii effigie. Berolini. Sumptibus G. Eichleri.*
 11. Pereira, A. S. 2006. *The Opportunity of a Disaster : The Economic Impact ot the 1755 Lisbon Earthquake*. Centre for Historical Economics and Related Research at York. York University.
 12. Ulmer, S. 2005. *Lissabon 1755 - das Erdbeben, das die Welt veränderte*. Neue Zürcher Zeitung. 26. Oktober.
 13. Shrady, N. 2008. *The last Day: Wrath, Ruin and Reason in The Great Lisbon Earthquake of 1755*. London. Penguin.
 14. Marquand, O. 2004. *Individuum und Gewaltenteilung*, Ditzingen. Reclam.
 15. Benjamin, W. 1999. "The Lisbon Earthquake", in *Selected Writings vol.2*. Belknap. [ベンヤミン「リスボンの地震」小寺昭次郎・野村修訳『ベンヤミン 子どもための文化史』、平凡社ライブラリー、二〇〇八年]
 16. Plato. 1925. *Plato in Twelve Volumes, Vol.9*. translated by W. R. M. Lamb. Cambridge, MA, Harvard University Press ; London, William Heinemann Ltd. [プラトン「ティマイオス」種山恭子訳、田中美知太郎・藤沢令男編『プラトン全集一四』、岩波書店、一九七五年]

Zoran Dimić "Catastrophe and Humanity (On the Youthfulness)"

翻訳：清水昭宏（首都大学東京人文科学研究科修士課程）